

大学生の自己主導的な学びに関する探索的検討 —早期インターンシップ後の学びの変容を通して—

樋口 健¹・高澤 陽二郎²(¹新潟大学教育戦略統括室・²新潟大学教育学生支援機構)

Short Report

Exploratory Study of Self-directed Learning by University Students: Through the Transformation of Learning after Early Internship

Takeshi Higuchi¹ and Yojiro Takasawa²(¹Educational Planning Office, Niigata University, ²Institute of Education and Student Affairs, Niigata University)

青年期から成人期への発達途上にある大学生の学びを捉える視点として、成人の学びの特徴である自己主導的な学びを捉えるのは意味があろう。本研究は、その試みとして、大学1・2年生を対象とする1ヶ月にわたるインターンシップ参加者5名について、終了から1年後に面接調査を行い、インターンシップ経験を契機とする自己主導的な学びの特徴を把握した。

5名の事例を総合すると、大学生はインターンシップを経て1年、自己省察をする中で、将来への問題意識、興味・関心を明確にし、自らの成長に合う機会を大学の内外から選択し、学びを全体として組み立てるようになっていく様子が見て取れた。

キーワード: 自己主導的な学び、成人学習、早期インターンシップ、省察

Keywords: Self-directed Learning, Adult learning, Early internship, Reflection

1. はじめに

大学教育において学生の主体的な学びの重要性が唱えられて久しい。この時、大学生が青年期から成人期への発達の途上にあることを踏まえると、大学生の主体的な学びを捉える視点として、成人学習の特徴である自己主導的な学びを捉えるのは意味があろう。成人教育学の蓄積を踏まえて言えば、それは「個々人が、他者の手を借りるか否かにかかわらず、自らの学習ニーズを診断し、学習目標を立ち上げ、学習への人的・物的リソースを明確化し、適切な学習計画を実行し、学習の成果を評価するなかで、イニシアチブを取っていくようなプロセス」と説明される(渡邊, 2002)。本研究の関心は、こうした自己主導的な学びが、大学生の学習経験の中でどのように促されるのか、その一端を探り、大学教育における課題を検討したいということである。

大学生の自己主導的な学びを促す学習経験は様々な存在しているが、ここでは大学での早期のインターンシップ参加を取り上げる。早期(大学1・2年)のインターンシップ経験が、学生に大学での学びに対する意味づけや主体的なコミットを促す効果があることは既に指摘されている(岩井, 2019)。ここで、インターンシップ経験を契機とした自己主導的な学びの特徴を明らかにできれば、大学時代早期のインターンシップ経験をその後の彼らの成長・発達にどう活かすのか、職業観の涵養や授業への動機付けだけでなく、広い視野から課題の検討が可能となろう。こうした認識に立ち、本研究では、試みとして、大学1・2年生時の約1ヶ月のインターンシップ経験を契機にその後の学生の学びがどのように変容し、自己主導的な学びが促されるか、その特徴を仮説的に明らかにし、大学教育における課題について検討する。

2. 研究の視点と方法

本研究では、早期インターンシップ経験者の学生の事例の把握を通じて2つの状況を明らかにした。1点目は、インターンシップを契機として、その後1年程度を経た段階で学生の自己主導的な学びがどのように変化しているのかの確認である。2点目は、そうした自己主導的な学びに影響したインターンシップの経験は何かの確認である。この2つを明らかにするためには、学生に対して、インターンシップの経験とそこから直接得た気づき、その後の1年間の意識と学習行動の変化を時間に沿って丹念に尋ねていく必要がある。

また、把握する自己主導的な学びの範囲としては、大学の授業以外の自主的な学びだけでなく、大学の授業科目も含めて捉えることとした。大学が提供する授業科目は学生が活用できる最大の学習機会である。固有の目的意識を持って選択し、自らの学びを広げているとすれば、それは大学生にとっての自己主導的な学びに含めて差し支えないと考えた。

調査対象は、新潟大学で全学部1・2年生を対象に開講されたインターンシップ科目（企業実習及び大学での事前事後学習を含む選択科目）の受講生である。同科目は約1ヶ月間の企業実習で実際の業務や課題提案に取組むものであり、それだけの期間の受入が可能な企業十数社（大学が開拓・調整）の中から学生が希望を示し、教員との相談を経て参加先を決定する。本研究では、平成30年度の受講生20名のうち5名を対象に、1人90分程度の面接調査を行い、参加後概ね1年を経た時点（令和元年12月）での学生の状況を把握した。対象学生の選定では学年・性別・所属のバランスを考慮し、調査協力を承諾した5名を対象とした（表1）。

表1 調査対象者の属性

	学部	性別	学年
Aさん	法	男	2（1）
Bさん	工	男	3（2）
Cさん	人文	女	2（1）
Dさん	経済	女	3（2）
Eさん	経済	男	3（2）

※学年は面接調査実施時の学年を、（ ）内は受講時の学年を示す

面接での聞き取り内容は、以下の通りである。この項目に基づき、ごく簡易な事前アンケートに記入してもらい、その記述を詳細に確認する形で問いかけを行った。

（聞き取り項目）

- ・インターンシップを通じた気づき、意識、行動の変化
- ・インターンシップを通じた大学での学びに対する意味づけの変化
- ・インターンシップ後1年間の大学の授業に対する意識や行動の変化
- ・インターンシップ後1年間の大学の授業以外での自主的な学習の状況
- ・基本的な学習観、将来の進路、大学生活の満足感 等

3. 早期インターンシップ経験後の変容と自己主導的な学習の状況に関する事例

次に、実施した面接の結果を踏まえ、早期インターンシップ経験者5人の学生の意識・行動の変容と自己主導的な学習の状況を表す事例を記述する。なお事例は、実際の面接での学生各自の多岐に渡る発言を要約して構成したものである。

Aさんの事例（法学部2年男性）

- ・実習先：新潟県内スーパー
- ・実習内容：競合店舗と比較した商品構成、カフェスペースを活用したイベント等の調査・提案

インターンシップに参加した理由には、将来の方向性を探したいということの他に、消極的な自分を変えるためという部分があった。実習先では、社員の店頭での態度や先輩の言葉から、自分の甘えや実力の無さ、奢りを痛感した。また、実習先経営者との懇談から非常に刺激を受け、起業や経営に対する関心が生まれた。こうしたことが契機となり実習後は、様々なことを学びたいと思うようになった。法学部の授業にはただ卒業するために取っている科目もあるが、使える授業もある。中でも会社法や企業法に興味を持って受講するようになった。また、法学部の授業だけでなく経済学部の経営戦略関連の授業も関心を持って受講するようになった。本や新聞、インターネットの動画等からも自分なりの方法で積極的にインプットを得ている。一方で、「テスト用の勉強」に合わせることに面倒さ、それ故に成績がそれ程良くないことも自覚している。

Bさんの事例（工学部3年男性）

- ・実習先：新潟県内部材メーカー
- ・実習内容：生産技術部門の作業分担（ステンレス加工における適切な加熱時間・温度の検証）

大学の講義で学んでいることは社会に出てからあまり役立たないのではないかと考えていた。しかし、実習での仕事に授業で学んでいる専門的な内容（金属組織の加工硬化）が役立ち、大学の講義をより大事にしていかなければなら

いと感じるようになった。将来の仕事について単に技術系というイメージしかなかったが、一つの企業・分野の中でも様々な仕事があると分かった。

インターンシップ後、大学の課外活動でもアルバイトでも順序やスケジュールを意識して動くようになった。また元来、自身に計画性がないことを自覚しているが、インターンシップ参加後は短期の語学留学にも参加するなど、自分の興味に従って未知の活動に取り組むことにはより抵抗がなくなっている。将来、機械系メーカーで働きたい意思があり、自分の専攻以外でも電機系のことを学びたいと思う一方で、工学系の分野に縛られずに広く考えるのも良いかなという意識も芽生えている。一方、周囲に影響されやすい部分があり、自己評価についても、周りの友人と比べて自分には目に見える（学びや取組の）成果が出ていないもどかしさを感じている。

Cさんの事例（人文学部2年女性）

- ・実習先：新潟県内食品メーカー
- ・実習内容：人事部門での書類管理効率化の調査・提案

大学受験の結果、今の大学への不本意入学という経緯もあり、1年次から就職活動の不安に対してとりあえず何かしないといけない強迫観念を持っていた。1年次で参加したインターンシップで先輩学生と一緒に課題に取り組む経験を経て、「未熟だが、行動して学んでいける」自分自身を自覚した。また何事も目的を考えるようになった。これは実習中「それは本当に大事な?」と常に問われた経験が大きい。この気づきを通して、何事に対しても自分の将来や大学生活での必要性の有無をはっきりさせるようになっていく。

また、就職不安からインターンシップに参加したが、終了後の省察と報告を通して企業で働くことは自分に合わないということを発見できた。現在は、自分の本当の興味・関心に忠実に、将来専攻予定の心理学や、興味の沸いた社会学の学習に専心している。関心のある科目しか取っていないので、全てに力を入れている。アンテナを広げて読書を重ね、さらに新しい関心が湧く。社会心理学にも興味が出てきた。

Dさんの事例（経済学部3年女性）

- ・実習先：新潟県内調理器具メーカー
- ・実習内容：会社案内やPR用動画の作成

両親の影響、高校時代の部活での努力の経験等から、大学で何か一生懸命に取り組めるものを探していたことが、インターンシップの参加動機としてあった（所属学部の授業ではそれが満たされていなかった）。インターンシップでは、企業で必要なコミュニケーション不足から担当者の厳しい評価も受けた。気づいたのは自ら主体的に行動を起こさないと何も変わらないということ。今なぜそれをやるのか、自分は何を求められているのか、考えて動くようになった。その後の

大学生活では、元々の行動力に加えて、実践とそこからの学びを自分なりに意味づけて、次の新たな行動を広げている（留学、アルバイト、簿記検定など）。大学での学びに関しては、授業で完結せずに実践することで身に付くと思い、人的資源管理論の知識をアルバイトの新人教育に応用するようになった。授業だけが勉強でなく、アルバイトも人との関わりなど全てのことが学びと考えるようになった。これは、就職活動を始めて省察により思考の言語化を積み重ねて気づいたものである。

Eさんの事例（経済学部3年男性）

- ・実習先：首都圏証券会社
- ・実習内容：金融業界理解と投資分析など

理学部から経済学部への転学部等の経験から、大学でどんな専門性を学ぶかについては、インターンシップ参加前からかなり自覚的であった。強く関心を持つ金融業界でのインターンシップを通じて、事前の自分の考えと現実との差、金融における価値の捉え方、競争力ある人材のあり方などが具体的に理解できた。インターンシップ後は、この経験を生かして、自分が望む将来のキャリアのための学びを行動として具体化させている。授業に頼らない独学での経済・金融の学習、学んだ証拠としての資格取得（証券アナリスト）、希望する業界の就職試験のための英語学習、などである。学習のコアタイムを設定し、休憩や睡眠時間などの管理を徹底して1日9時間の学習を続けている。大学の授業は、金融の仕事に生かせる科目がないか見極めるようになった。卒論にも関心はあるが、自分の学びの集大成は証券相場を読みこなせる実力をつけることであり、証券アナリストの資格取得を優先した。

4. 早期インターンシップ経験を契機とした自己主導的な学びの特徴

次に、3. で記述した5件の事例を総合的に踏まえ、早期インターンシップ経験を契機とした自己主導的な学びの特徴について考察する。

4.1. 注力する学びを明確化する

まず言えるのは、インターンシップ経験を通じて、大学での学びに対する向き合い方が明確にされることである。職業人としての責任を伴う実務経験を通じ、それまで漠としていた将来観に何らかの方向性を得て、大学でどのような学びに注力するのか自覚の下に自主的に学びを展開する様子が見て取れた。例えば、Eさん（経済学部3年男性）は、証券会社での実習を通して従来からの金融分野に対する興味に更なる確信を得て、当該分野の専門的な学習と証

券業界に通用する資格取得に、あえて大学時代の学びの焦点を絞った。卒業論文作成への関心はあるものの、自らの将来のためにそれはせず、証券業界に通用する難関資格取得に挑戦している。Cさん（人文学部2年女性）の場合は、インターンシップ経験の省察を通じて、企業への就職は自分には向かないと自覚した。それまでの将来不安から早期の就職活動に向かおうとしていた態度を一変させ、あくまで自分の興味・関心に忠実に、自律的に心理学や社会学の専門的な学習に専心することを決め、大学院進学も視野に学業に邁進している。

4.2. 望む学習経験を学部や大学の枠を超えて求める

次いで見て取れたのは、自らが望む学習経験を広く所属学部の専門や大学を超えて求め、組み立てる行動が生まれているということである。例えばDさん（経済学部3年女性）の場合は、インターンシップの後、短期留学や簿記検定など様々な学びに取り組むとともに、アルバイトも学びの場と捉え、意図して、組織のリーダーとしての仕事において授業で学んだ人的資源管理論の知識を応用する努力をしている。その根底には省察を通して気づいた「知識は、授業だけでなく実践の中で試して身につけるもの」、「人との関わりもアルバイトも全て学び」という独自の経験主義的な学習観がある。また、Aさん（法学部2年男性）は、実習先の経営者との対話に触発され、企業経営に興味を持ち、専門を企業法務に定めた。さらに学部を超えて経営戦略に係る学習を進めている。

4.3. 目的意識の強化と省察の習慣化が、必要な学機会を探索する力につながる可能性

では、こうした自主的で選択的な学びが進む背景にはインターンシップの何が影響しているのか。学生の事例から考えられることは以下の2点である。1点目は、仕事の基本動作として「今何をすることが必要か、行動の目的を問う」必要への気づきが強調されていたことだ。2点目はインターンシップを通じた省察の習慣化によるそうした姿勢の強化である。Cさん（人文学部2年女性）、Dさん（経済学部3年女性）により顕著であったが、このことが、学生の「今自分に必要な学びは何か?それはなぜか?」を問う姿勢に結びつき、大学内外に存在する様々な機会を自らの成長の観点から探索し、必要な学習機会として見定める力につながっている可能性がある。

5. 大学教育における課題

ここまで、大学早期のインターンシップ経験を通じた学生の学び方の変容について、自己主導的な学びを促す観点から5件の事例を踏まえて検討した。総じて見ると、学生はインターンシップを経て1年、自己と向き合う中で、自らの将来に向けた成長に適う機会を大学内外から選択し、学びを全体として組み立てるようになっている様子が見て取れた。このことは、早期のインターンシップ経験が、学生の自己探索に基づく自己主導的な、幅広い学びを促す契機として一定の可能性を持つことを示唆している。ここで、自己主導的な学びが自らの意思に基づく自由な学びであることを前提とすれば、大学では、学生に対して自らの経験の省察と学びに向かう意味づけをさらに促す支援が基本となろう。その上で、日常のキャンパスにある学習資源を捉えて何ができるか、学びのサポートに繋げることが求められよう。

一方、こうした支援を実施する手前には議論すべき課題がある。それは、大学生の自己主導的な学びを大学としてどう捉えるべきか、ということである。学びにおける自己主導性が高まるほど、彼らの学びの世界・全体像は大学側から見えづらくなる可能性がある。特に大学の専門や大学自体の枠を超えて広がった場合、学生にとっては自らの成長に叶う満足な学びだとしても、大学側からは正当な学びからの「離反」と見えるのかもしれない。こうした大学側から「見えざる学び」「意図せざる学び」を大学教育としてどこまで捉え支援すべきなのか、今後の論点と考える。

6. 本研究の限界と課題

本研究は新潟大学の事例の考察であり、一大学における仮説の導出に過ぎない。また本研究で取り上げたインターンシップは選択科目であり、受講学生は当初から自己主導的に学ぶ素地を身に付けていた可能性がある。このため早期のインターンシップ経験が全ての学生の自己主導的な学びを促すとは言い切れない。本来は、必修科目の場合も含めた検証が必要である。今後、こうした課題を克服しつつ、さらに継続して研究を進めていきたい。

引用文献

- 岩井貴美（2019）.「大学生低学年におけるインターンシップの考察—職場の他者からの支援と自ら学ぶ意欲との関連性—」『インターンシップ研究年報』第21号、11-19.
- 渡邊洋子（2002）.『生涯学習時代の成人教育学 学習者支援へのアドヴォカシー』明石書店、127.